様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　８ 月 ２９ 日現在

機関番号：２４２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１２４６９

研究課題名（和文）居宅要介護高齢者に対する集団音楽療法プログラム開発に向けた基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research for developing a group music therapy program for the elderly requiring nursing care at home

研究代表者
横井　和美（yokoi, kazumi）

滋賀県立大学・人間看護学部・教授

研究者番号：８０３００２２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，要介護高齢者の通所介護施設で集団を対象とした音楽療法の実践から，集団を活用した音楽療法士の介入内容を明らかにし，通所介護施設における要介護高齢者の他者交流への支援について検討した．
通所介護施設で実践している音楽療法士13名に，音楽療法の治療過程に沿って，事前準備段階と実施段階，評価段階の３つ時期に分けて調査を行った．それぞれの段階から見出された集団を活用した音楽療法士の介入から意図的な他者交流への視点が示唆された．

研究成果の学術的意義や社会的意義
治療の場ではなく生活機能を維持・改善し在宅生活の継続をめざす通所介護施設において，音楽療法士が集団を活用して介入している内容を明らかにすることは，音楽を通したコミュニケーションでの他者との交流支援に活用できる．音楽活動を通しての他者交流は，通所介護施設を利用する要介護高齢者の社会的機能の向上や社会的孤立の防止に貢献できるものと考える．また，音楽療法の実践から得られた本研究の成果は，集団を活用する音楽療法の専門的技術の確立や音楽療法士教育にも役立つものと考える．

研究成果の概要（英文）：In this study, we clarified the intervention content of a music therapist who utilized the group from the practice of music therapy for the group at the day care facility for the elderly requiring long-term care.Then, we examined support for elderly people requiring long-term care to interact with others in day care facilities.
We conducted a survey of 13 music therapists practicing in day care facilities, divided into three stages: a preparatory stage, an implementation stage, and an evaluation stage, along with the treatment process of music therapy. The intervention of the music therapist utilizing the group found from each stage suggested the viewpoint of intentional interaction with others.

研究分野：高齢者看護

キーワード：通所介護　要介護高齢者　集団の活用　音楽療法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

超高齢社会を迎え要介護高齢者に対する介入や体制の調整は，わが国にとって重要な課題となっている．高齢になると，病弱になったり介護が必要になったりすることが避けられないことから，社会全体で介護を支えていく介護保険制度が平成 12 年（2000 年）から開始され，3 年ごとに見直しが行われている．平成 26 年（2014 年）の制度改正から，地域包括ケアシステムの構築と費用負担の公平化が行われ，介護保険制度は，高齢者の増加や経済状況によって，見直され改正が行われてきた[1)]．

介護保険の利用者は，要介護状態の判断を行う要介護認定を受け，要介護 1～5 の 5 段階，要支援 1～2 の 2 段階に区分され，認定された要支援・要介護状態に応じた給付金を得て介護サービスを利用することができる．入所施設サービスの対象とならない要介護 1 と要介護 2 の高齢者は，居宅サービスを利用して地域で在宅生活を送る．

居宅サービスの一つである通所介護は，要介護認定を受けた方が，在宅生活を続けていけるよう身体機能の維持・向上を目指し，機能訓練をしたり，他者との交流を通して社会的孤立を防いだり，認知症予防を図っている．この通所介護での社会参加活動として取り組まれている内容には，事業所内での利用者同士の交流やコミュニケーション支援が 80％以上[2)]と報告がなされ，要介護高齢者が在宅生活を継続していく上で，他者との交流への支援が必要とされている．

他者との交流への支援に対して，通所介護では，2012 年の介護報酬改定[3)]で「生活機能向上グループ活動加算」が示され，種々の専門職が集団に対する支援を行ってきた．

その一つに，集団を対象とした音楽療法がある．音楽療法は，「音楽のもつ生理的，心理的，社会的働きを用いて，心身の障害の回復，機能の維持改善，生活の質の向上，行動の変容などに向けて，音楽を意図的，計画的に使用するもの」と日本音楽療法学会[4)]で定義され，様々な介入目的に応じて取り入れることが可能なものである．日本音楽療法学会国家資格推進委員会の 2011 年度調査[6)]によると，音楽療法の実践の場は高齢者施設が 45.7％と半数を占め高齢者を対象とした音楽療法が盛んに行われている．村林ら[6)]は介護施設における要介護高齢者に対して集団音楽療法を行った結果，介護を要する高齢者において，音楽療法による音楽活動および心理社会的活動の向上とともに，認知機能，ADL，および QOL を改善し，介護予防に寄与できることを報告していた．通所介護施設での音楽療法も要介護高齢者の介護予防に貢献できるものと考える．しかし，我が国における通所介護施設における音楽療法に関しての報告は数件程度と少ない．

通所介護施設での集団を対象とした音楽療法は，利用者間の相互作用を高めることにどのような効果があるのか，また音楽療法士は集団をどのように活用して利用者間の相互作用に介入しているのかは明らかになっていない．

治療の場ではなく生活機能を維持・改善し在宅生活の継続をめざす通所介護施設において，音楽療法士が集団を活用して介入している内容を明らかにすることは，通所介護施設での他者との交流支援に活用できるものと考える．さらに，要介護高齢者の集団音楽療法のプログラム開発への示唆を得られるものと考える．

２．研究の目的

本研究では，要介護高齢者の通所介護施設で集団を対象とした音楽療法の実践から，集団を活用した音楽療法士の介入内容を明らかにし，通所介護施設における要介護高齢者の他者交流への支援について検討する．

３．研究の方法

(1)　研究デザイン

研究疑問や研究目的が，通所介護施設の要介護高齢者の集団を対象に音楽療法を実践している音楽療法士に対して，集団を活用した音楽療法士の介入内容を明らかにするため，本研究では音楽療法士に対する半構造化面接法と参加観察法を用いてデータ収集を行い，MAXQDA2022 を活用し事象を質的に分析した．

(2)　研究対象

研究協力者は，通所介護施設で要介護高齢者の集団を対象とした音楽療法を行っている音楽療法士（日本音楽療法学会認定者）で，本研究の趣旨に賛同し，同意した者とした．

(3)　**データ収集期間**：2019 年 4 月から 2020 年 2 月の期間に調査を行った．

(4)　データ収集項目と方法

調査は音楽療法の治療過程に沿って，事前準備段階と実施段階，評価段階の 3 つ時期に分けて調査を行った．

A：音楽療法実施前の調査：質問紙調査とインタビュー

①同意が得られた研究協力者に対して事前に，音楽療法士の経験年数や介入している通所介護施設の概要および対象者の概要を記載するフェイスシートと実施する音楽療法プログラムの概要（曲数，選曲，音楽活動の種類，流れ等）を記載する用紙を送付して記載の協力を求めた．

②事前配布用紙の記載内容の説明を受け，インタビューガイドに基づきながら音楽療法が開始の準備に影響のない時間に半構造化面接を 30 分程行った．

③インタビューガイドは，対象としている集団の捉え方，対象集団に提供する音楽療法のプログラムの工夫についてである．

④・インタビュー内容は，同意を得て IC レコーダーに録音し同時にメモをとった．

⑤分析方法

・IC レコーダーに録音した内容から逐語録を作成した．

・逐語録から集団に対する捉え方とプログラムに関する工夫に関するコード抽出し，類似性に基づきサブカテゴリ，カテゴリ化した．対象個々のカテゴリ，サブカテゴリの特徴についてマトリックスを用いて比較し，共通点や相違点の発見など，さらに分析を深めた．

B：音楽療法実施中の調査：参加観察とインタビュー

①音楽療法の実施場面に参加し，音楽療法の実施に影響がなく音楽療法士の言動が観察できる場所で，提出された音楽療法計画と照合しながら音楽療法士の個人に対する介入，音楽療法士の集団に対しての介入,参加者間の交流に対する介入等を IC レコーダーに実況録音と同時にメモした．

②音楽療法終了後に，音楽療法実施中の音楽療法士の個人に対する介入，音楽療法士の集団に対しての介入,参加者間の交流に対する介入に対してインタビューを行いメモ内容との確認を行った．

③分析方法

・音楽療法士の会話および言動の実況録音および参与観察記録から，音楽療法士の個人に対する介入，音楽療法士の集団に対しての介入，参加者間の交流対する介入の内容を音楽療法実施の流れ（導入・展開・終結）別にコード化し，類似性に基づきサブカテゴリ，カテゴリ化した．

C：音楽療法後の調査：インタビュー

①音楽療法実施後の通所介護施設のケアに支障のない時間や場所で，インタビューガイドに基づき半構造化面接（30 分程度）を行った．

②インタビューガイドは，音楽療法を実施した対象者や集団をどのように捉えながらプログラムを遂行の実施や変更を行ったのか，その理由についてとした．

③インタビュー内容は，同意を得て IC レコーダーに録音し同時にメモをとった．

④分析方法

・IC レコーダーに録音した内容から逐語録を作成した．

・逐語録からプログラムの遂行に影響を及ぼした出来事と変更内容をコード化し，類似性に基づきサブカテゴリ，カテゴリ化した．

(5)　**倫理的配慮**として，逐語録を作成する過程で個人が特定される内容は記号化しコード化した．研究者の所属施設での倫理審査委員会の承認を得て行った．

コード化をした段階で研究協力者に解釈の確認を行った．また，サブカテゴリ，カテゴリの生成に対しては，音楽療法の研究者や集団援助の研究者のスーパーバイズを受けて検討を重ね信憑性を高めた．

４．研究成果

(1)　研究協力者の概要

通所介護施設側からの情報提供（施設規模，当日の利用者数，要介護度別人数等）について協力が得られ,通所介護施設の異なった集団ごとに音楽療法を実施している 13 名の音楽療法士から研究協力が得られた．音楽療法士歴は１～20 年で，対象とした集団の音楽療法歴は１～10 年であった．学会認定音楽療法士を取得してからかかわった集団もあれば，音楽療法士を取得する以前からかかわっていた集団もあった．

通所介護施設の定員により集団の人数は，10～26 名と異なりがあったため，通所介護施設の規模が網羅できるよう研究協力者を拡充して通常規模型で実践している音楽療法士５名，小規模型で実践している音楽療法士４名，さらに大規模型で実践している音楽療法士４名とした．

(2)　要介護高齢者の通所介護施設で集団を活用した音楽療法士の介入

A：音楽療法実施前の調査の結果：音楽療法準備段階での集団を活用した音楽療法士の介入計画

音楽療法士は対象となる集団の把握として 100 コード，24 サブカテゴリ，7 カテゴリが生成された

音楽療法士は，音楽療法に参加する個人の特徴として【参加者の出身や生活歴】【参加者個人の身体・認知機能】【今までの音楽活動状況】を捉えていた．また，通所介護施設に所属する集団として，【メンバー構成】【施設の利用機能や地理的環境】【施設内での活力や表現】【参加者間の言動や関係】の視点も捉えていた．

予想している対象者の音楽療法プログラムとして，50 コード，13 サブカテゴリ，5 カテゴリが生成された．集団を活用した音楽療法計画には【誰もが知っていて参加しやすい楽曲の選択】【身体・認知機能を活用する合唱や合奏活動の取り込み】【継続的な参加につなげる楽曲の選択】【生活における意味付けを意識した音楽活動】【時間的に効率的な進行ができる準備】の内容が組み込まれ介入を企画していた．

B：音楽療法実施中の調査：音楽療法実施中の集団に対する音楽療法士の介入

集団を活用した音楽療法の実施中の音楽療法士の介入を，音楽療法過程である導入期・展開期・終結期に沿って，介入内容コード化し，サブカテゴリ，カテゴリ化した．

導入期では【誰もが口ずさめる曲や同じ曲を使って始まりの伝達と歌うことへの準備】【名前を入れた歌でMT と個別の関係を重視】【個への観察とアプローチで気にかける人を見出す】【集団の中での個の紹介】【集団全体の当日の活力のアセスメント】のカテゴリがあった．

展開期では【参加者が集中できる注意分散機能や身体活動を取り入れた楽器活動や合唱の提供】【段階をおって活動の難度や活性度の変更】【当日のテーマとの関連を意識した曲の紹介とエピソードの問いかけ】【前回のセッション内で得た情報を音楽選曲のプログラムにつなげる】【気になる人への個別のアプローチ】【参加者個々の音楽集中程度の評価と返答】【参加者の音楽集中力から音楽提供への自己評価】のカテゴリがあった．

終結期では【当日のテーマに関して回想できる曲の提供】【午後の活動への準備と終わりへの伝達】【音楽活動内容を提示せず個々の参加の自由性の尊重した演奏】のカテゴリがあり，展開の時期により集団と個人に対する介入が異なっていた．

サブカテゴリ，カテゴリに関しては，現在，再考中である．

C：音楽療法後の調査：集団での効果を高めるための音楽療法士のプログラム変更と介入

事前にプログラムされた音楽療法計画を提供していく中で，プログラム遂行に対して影響を及ぼした出来事と変更内容をコード化し，類似性に基づきサブカテゴリ，カテゴリ化した．38 コード，21 サブカテゴリ 6 カテゴリが生成された．

【活動の効率化を目指した変更】【参加への誘導と仲間づくりの促進】【参加者の活動に合わせた音楽活動の調整】【参加者の歌唱に合わせた音楽要素の調整】【施設の広さやスタッフとの協力に応じた活動の変更】【指定された時間内に終了するための時間調整】のカテゴリがあり，音楽活動に対する活性化への介入と参加者間に対する介入の変更を行っていた．

(3)　今後に向けて

治療の場ではなく生活機能を維持・改善し在宅生活の継続をめざす通所介護施設において，他者との交流や社会的孤立の防止への介入も重要な役割である．今後，通所介護施設での集団に対して行っていた音楽療法士の介入が，通所介護施設を利用する要介護高齢者の社会的機能の維持・拡大に向上につながっていくのかの追究を行い，要介護高齢者が地域や在宅で自立した生活が営めるような支援として確立を図りたい．

＜引用文献＞

１）厚生の指標：国民の福祉と介護の動向 68（10），p 167-173.

２）令和元年度老人保健健康推進等事業「通所介護の平成 30 年度介護報酬改定等の検証に関する調査研究事業」報告書（三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング），p 31.

３）30）平成 24 年度介護報酬改定の概要：社保審―介護給付費分科会　第 88 回　資料 1-2.（https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002113p-att/2r98520000021163.pdf. 2022.2.24）

４)）日本音楽療法学会ホームページ，音楽療法の定義．https://www.jmta.jp/about/outline.html

５）日本音楽療法学会国家資格推進委員会（2012）．音楽療法の実施施設と対象者の広がり及び職能成長の鍵となるスーパービジョンの現状　2011 年度会員アンケート結果の報告，日本音楽療法学会.

６）村林 信行，佐治 順子，中山 ヒサ子，藤本 禮子，宮本 啓子，甲谷 至，新倉 晶子，二俣 泉，久村 正也，村井 靖児，佐々木 大輔，：日本音楽療法学会特別プロジェクト研究委員会　音楽療法の介護予防関連要因についての評価研究，日本音楽療法学会誌 14（1） p 58-65，2014 年.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 横井　和美
２．発表標題 居宅要介護高齢者の集団を意識した音楽療法士の関わり
３．学会等名 第19回日本音楽療法学会学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 横井和美
２．発表標題 要介護高齢者の集団に対する援助の動向と課題―国内文献からの検討―
３．学会等名 第３７回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	菅田　文子 (sugata ayako) (00369521)	大垣女子短期大学・その他部局等・教授 (43702)	
研究分担者	中川　美和 (nakagawa miwa) (80778647)	滋賀県立大学・人間看護学部・講師 (24201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 NR-JACNet（ニューヨーク大学ノードフ・ロビンズ音楽療法センター日米コミュニケーションプログラム）からカオル・ロビンズを招き、コミュニティ音楽療法ーミュージッキングを開催した	開催年 2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関